

# ブラジル日系社会の歴史を伝える 手段についての一考察

—イグアッペとレジストロにおける博物館の可能性—

How to Pass Down Japanese-Brazilian Heritage? Plans for a Museum in  
Iguape and Registro

---

永井美穂

NAGAI Miho

## はじめに

ブラジル連邦共和国サンパウロ州南西部のリベイラ河沿岸にあるイグアッペとレジストロは、いずれも伯刺西爾拓植株式会社（以下伯刺西爾拓植）の日本人植民地開拓で日本人集住地を持つことになった<sup>(1)</sup>。筆者は2016年11月、2017年11月の調査を通して、これらの地域で日系社会史を後世に伝える手段として、博物館的な施設が果たす役割について注目した。

伯刺西爾拓植による1913年の桂植民地、1914年のレジストロ植民地開設で日本人移民が入植して以来、これらの地域でも他の日系コロニアと同じように記念誌や記念物制作、記念式典、イベント等、地域の日系社会の歴史を伝え、顕彰する活動を行ってきた。小稿では、これらの地域において日系社会の歴史を伝えるために行われてきた活動を確認した上で、あらためて博物館的な施設の意義と可能性を考察する。

## 1 日系社会の歴史を伝える手段

イグアッペ、レジストロにおいて、地域が日系社会の歴史を伝えるためにつくった記念誌、書籍、記念物、道路等施設名称、記念式典、イベント、登録、博物館から代表的なものを挙げる。

### 1) 記念誌

ブラジルの日系社会では、耕地、移住地・植民地、出身自治体・地域、会社、渡伯時のグループなど様々な記念誌がつくられてきた。その多くがいわゆる「〇〇年史」であるが、新聞社などが編む「年鑑」なども記念誌の類であろう。情報を集積して整え、広く後世に伝えるという機能は、博物館と共通するものでもある。地域史にあたるのは、いわゆる「コロニア史」で、移住地や植民地など地域の日系社会単位でつくられる。特に第二次世界大戦前に刊行されたものには、コロニア全体の歴史と合わせて各家族の写真や渡伯後の歴史が詳しく掲載されていることが多い。

伯刺西爾拓植、海外興業株式会社<sup>(2)</sup>（以下海興）が拓いたリベイラ河流域の桂植民地、レジスト

ロ植民地、セッテバラス植民地は「イグアッペ植民地」と称された。このイグアッペ植民地の記念誌として代表的なものは、1928年に渡伯し、レジストロ市街で写真館を営んでいた北海道出身の安中末次郎が撮影・制作した『海外興業株式会社経営 伯刺西爾国イグアッペ植民地創立廿週年紀  
念写真帖 1913-1933』であろう<sup>(3)</sup>。イグアッペ植民地全体及び各植民地の沿革、概況と入植家族の様子を伝える写真帖で、表紙にはポルトガル語で「ALBUM COLONIA IGUAPE 1913-1933」と書かれているが中身は日本語で、海興と及びイグアッペ植民地植民者一同の賛助となっている。伯刺西爾拓植創立や制作当時の海興の役員などの肖像写真や揮毫、入植地割図に加え、植民地の施設や各家族など豊富な写真と解説で構成されている。

1963年、植民50年を記念してレジストロ植民地開設五拾年祭祭典実行委員会が『レジストロ郡現勢概覧』を、レジストロ連合青年会とレジストロ文化協会が『イグアッペ植民地開拓五拾週年紀  
念写真帳』<sup>(4)</sup>を刊行。本写真帳は日本語を中心に作られてはいるがポルトガル語併記で、特に各家族の歩みと現状を紹介する「個人編」の基本情報は、すべての家族についてポルトガル語併記である。1978年にはレジストロ六十年史刊行委員会が『レジストロ植民地の六十年』を日本語で制作、刊行している。

2013年のイグアッペ植民地入植100年を記念して刊行されたのは、ニッケイ新聞編『一粒の米  
もし死なずば ブラジル日本移民レジストロ地方入植百周年』（2014年刊行）である。同年から翌年にかけてサンパウロの邦字紙のニッケイ新聞が127回連載した内容を一冊にまとめたもので、入植100年を一緒に祝うという立場で同紙編集長の深沢正雪氏が執筆した。歴史的な背景と入植者について丁寧な資料調査とインタビューを重ね、地域の歩みを概観しながらそこに生きた人たちの顔が見える内容となっている。同書は日本語で制作されたが、2018年にポルトガル語に翻訳、刊行されたのは画期的である。

同じく、入植100年を記念して刊行されたのが、レジストロ日伯文化協会編『CENTENÁRIO  
COLONIZAÇÃO JAPONESA IGUAPE—REGISTRO—SETE BARRAS』である。同書は、イグアッ  
ペ植民地が位置する3つの自治体の日系社会の歴史、諸団体の活動、家族について、豊富な写真と  
ともに紹介するもの。日本語は名簿の氏名だけで、そのほかは完全にポルトガル語で制作されてい  
る<sup>(5)</sup>。

## 2) 記念碑、モニュメント類

ブラジル各地には、日系社会の歴史を伝える記念碑、モニュメント類がある。石碑、鳥居、芸術作品など形態は様々ではあるが、誰もが親しく見ることができる場所にあり、その歴史を伝える役割を日々果たし続けている。

イグアッペとレジストロにある日系社会の歴史を伝える記念碑には、「ブラジル最初の入植〇年記念」と「移民100年記念」の2種類がある。

入植の周年記念物を古い順に挙げると、1963年の入植50周年記念碑「PENHOR DE GRATIDÃO」（Praça dos Expedicionários / レジストロ）、1983年の入植70周年記念碑「入植七十年の碑」（Praça Beira Rio / レジストロ）、1988年の入植75周年記念碑「拓魂」（Rua Claudino P da Silvaに面する小広場 / イグアペ）、1998年の入植80周年記念碑「闘魂」（Praça Beira Rio / レジストロ）、2003年の入植90周年記念碑「COMEMORAÇÃO DOS 90 ANOS DA 1ª COLONIZAÇÃO JAPONESA NO BRASIL—COLÔNIA KATSURA—JIPOVURA—IGUAPE—SÃO PAULO」（Praça Katsura / イグアペ＊建立は2006年）。

2008年のブラジル日本移民100周年記念物としては、豊田豊「CAMINHO DA LIBERDADE」(Praça dos Expedicionários / レジストロ 2007年)、百周年委員会<sup>(6)</sup>「1908-2008 100 ANOS IMIGRAÇÃO JAPÃO BRASIL」(Rua Alcides Passos Carneiro と Av. Clara Gianotti de Souza のロータリー / レジストロ)などがある。

### 3) 施設命名

日系社会の歴史を記念して、道路や公園等の施設に関連の名称を冠する場合がある。これもまた、長く歴史を伝える活動の一つである。

イグアペには、桂植民地発展に尽くした柳沢喜四郎を記念した Rua Kishiro Yanaguisawa (柳沢喜四郎通り)、桂植民地を記念した Praça Katsura (桂広場)がある。レジストロには、同地に紅茶栽培を導入した岡本寅蔵を記念した Bosque Municipal Torazo Okamoto (市立岡本寅蔵森林公園)がある。また、レジストロ日伯文化協会 (ACNBR: Associação Cultural Nipo- Brasileira de Registro 以下レジストロ文協)の前の通りはレジストロ市の友好姉妹都市の岐阜県中津川市を記念した Rua Nakatsugawa (中津川通り)である<sup>(7)</sup>。

### 4) 記念式典・イベント

イグアッペ、レジストロ両地域とも、長年にわたり、桂植民地入植の1913年を起源とする周年事業を行ってきた。当初よりセッテバラスを含む広域のイグアッペ植民地として合同で行われることもあり、その場合は地域の中心に位置し、人口が多く町が発展を遂げたレジストロが中心になる場合が多かった。ここでは、近年行われた記念式典を紹介しておく。

2013年10月31日にレジストロで開催された日本移民入植100周年記念式典は、イグアッペ植民地のあったレジストロ市、イグアペ市、セッテバラス市の合同で盛大に行われた。これに対して、2018年11月2日に開催されたブラジル日本移民110周年・レジストロ入植105周年記念式典は、レジストロ単独で行われた<sup>(8)</sup>。なお、レジストロ植民地の開設は1914年であるが、周年事業は桂植民地開設の1913年を起点としており、特にレジストロの日系社会における植民地の歴史認識に大きな影響を与えている。

近年、イグアッペでは入植記念日に合わせて「Katsura Matsuri (桂祭)」が開催されている。2018年11月10、11日には第4回 Katsura Matsuri を開催。桂の地名が公式的に存在しないことも相まって、その歴史を後世に伝え続けるための努力が為されている。

2017年11月26日、レジストロ第五部 (Raposa) で開催された 1º TANUKI FESTIVAL は、サンパウロ州農業連合 (FAESP: Federação Agricultura do Estado do São Paulo) やリベイラ溪谷農村組合 (Sindicato Rural do Vale do Ribeira) に加え、レジストロ市、セッテバラス市といった自治体も関係して、日系社会の歴史と文化、有機農業による特産品などを観光資源として利用する試みであった。日系社会の歴史と文化を地域活性化に活かす活動は、日系社会だけでなくレジストロ全体にとっても重要であると考えられている。

### 5) 登録・認定

2006年3月30日、レジストロ市はサンパウロ州より日本植民地ゆかりの地 (Marco da Coloniza-

ção Japonesa<sup>(9)</sup>）の認定を受けた（サンパウロ州法令 No. 50652）。イグアペ市は 2008 年 1 月 11 日に連邦政府から日本人植民地発祥の地（Berço da Colonização Japonesa no Brasil<sup>(10)</sup>）の認定を受けた（大統領令 No. 11642）。相次いで行われたこれらの認定は、両地域の意識の在り方を示す事象として興味深い。

1987 年、サンパウロ州立歴史考古芸術観光遺産認定局<sup>(11)</sup>が海興の精米所と倉庫であった KKKK を文化遺産として登録。また、2010 年、国立歴史芸術遺産研究所<sup>(12)</sup>が、植民初期の家屋や教会、茶園、KKKK などイグアッペ、レジストロの 14 件をリベイラ溪谷の文化風景遺産に登録した。連邦政府や州政府による文化遺産登録は、これらが日系社会の歴史を伝える資料として重要であることを公的に認めるものであり、地域や日系社会にとってもその重要性を発見する機会となった。

## 2 博物館の可能性

### 1) ブラジルにおける日本移民史関連博物館施設

ブラジルにおける日本移民史の博物館として最も知られているのは、ブラジル日本文化福祉協会が運営するブラジル日本移民史料館（Museu Histórico da Imigração Japonesa no Brasil / サンパウロ）である。1978 年、ブラジル日本移民 70 周年を記念して、サンパウロ市内の東洋人街（かつては日本人街と呼ばれていた）の文協ビルに開館した。同館設立に際してはブラジルの移民社会全体の支援を受け、各地から資料の寄贈を受けている。

企画の中心になったのは社会学者でサンパウロ大学教授の斎藤広志で、斎藤の要請に応じて国立民族学博物館館長の梅棹忠夫が協力。開館時の展示は日本の丹青社が手掛けた。

小笠原公衛は、2008 年の時点でブラジル国内には 16 館ほどの移民史料館・日系博物館があると述べている（小笠原、2008）。その後、現在に至るまで数館<sup>(13)</sup>が開館し、現在は 20 施設を数える。

### 2) イグアッペの挑戦

イグアッペ日伯文化体育協会（ACENBI : Associação Cultural e Esportiva Nipo-Brasileira de Iguape 以下イグアッペ文協）では、2013 年の入植 100 年式典の準備を進める中で、桂植民地の記録と記憶を次世代に伝える必要性が強く意識されるようになり、桂植民地に関する資料や情報を収集する活動が行われている。桂植民地の居住者はすべて移転したため、現在同地には住民がいない。さらに、リベイラ河の蛇行の変化によって、残されていた家屋が川に落ちて無くなっている。このままでは、桂植民地のことが何もわからなくなってしまうという切実な危機感が、彼らの原動力となった。桂植民地出身者を中心としたこの取り組みは、文協内に桂植民地の資料を展示するスペースを増設する計画となって、現在も進められている。また、入植記念日のある 11 月に「桂まつり」を開催し、同植民地の歴史を広く伝えることに努めている。

### 3) レジストロ日本移民史料館の再生

#### (1) レジストロ日本移民史料館の現況

2002 年、レジストロに Memorial da Imigração Japonesa do Vale do Ribeira（レジストロ日本移民史料館：以下移民史料館）が開館した。1922 年に海外興業株式会社（KKKK）が精米所と倉庫として建





築した建物の精米所部分を利用した博物館で、レジストロ市からの委託を受けてレジストロ文協が運営にあたった。KKKKは、1987年にCONDEPHAATが文化遺産として、2010年にIPHANが「リベイラ溪谷の文化風景遺産」の一つとして登録した歴史的建築物である。改修工事を経て、倉庫部分は州教育局の研修センターに、精米所部分は移民史料館となった。この歴史的な建物で活動が続けてきた同館であったが、2016年、KKKKの建物全体がSESC Registro<sup>(14)</sup>となることが決まったために閉館<sup>(15)</sup>。州政府と市が費用を負担して、新しい移民史料館を建設することになった。場所は、KKKKから南西に徒歩5分程度に位置するリベイラ河に面した広場。毎年11月2日（死者の日Dia de Finados）に行われるレジストロ名物の灯籠流しで、盆踊りの会場として多くの人を集める場所でもあった<sup>(16)</sup>。長年KKKKの改修を手掛けてきた<sup>(17)</sup>Brasil ArquiteturaのMarcelo Carvalho Ferraz氏が担当し、2016年の時点で既に設計図面、完成予想図が示されている<sup>(18)</sup>。

2018年12月現在、新しい移民史料館の建築工事は未着工のまま中断し、以来現在に至るまで休館は続いている。休館時期が長くなるのは本意ではないだろうが、博物館の可能性を再考し、新たな役割を持つ施設として再生する好機ではある。

## (2) 課題と新たな役割

先述の通り、移民史料館はレジストロ市の委託を受けてレジストロ文協が運営している。2002年の開館時も資料収集、展示制作とも文協が行い、さらに移民史料館に常駐する職員を配置し、維持管理してきた。市や文協への遠来の客を案内したりすることはあったが、移民史料館を活用してイベントを行ったり、積極的に資料を収集するなどの活動をすることはなかった。この点は、同館の課題でもある。

もう一つの課題は、人が集まる仕組みを整備する余地があることである。博物館は、文協会員でなくても、イベントの日でなくても、入館することができる施設である。観光客や住民など多様な立場の人が自由に足を運ぶ場となれば、開かれたレジストロ文協の拠点の一つとして発信力を持つ施設になることができるだろう。

新移民史料館はレジストロ日系社会の記念碑的な建築物であるKKKKを離れはしたが、人が集まるということを考えると悪い条件下にあるわけではない。SESC Registroとして一層注目を集めるようになったKKKK、日系一世でブラジルの国民的彫刻家であるTomie Otake作のオブジェ、大鳥居がある、リベイラ河畔の一带に位置する。さらに、近くのMercado Municipalでは、日本移民が導入発展させ、レジストロを支える商品作物である茶や蘭草の製品が土産物として販売されている。レジストロの日系社会に対する関心を高めるこのエリアの中で、移民史料館はその中で中心的な役割を担う施設になることができるだろう。

レジストロには、IPHAN登録の文化遺産が点在している。また、有機農業による特産物や日系文化などを資源として観光事業を展開する試みも始まっている。レジストロ日系社会の歴史を伝える移民史料館は、リベイラ河畔の濃密な観光エリアと市郊外にある日系社会の歴史的遺産と連携することができ、観光事業の核の一つとなることができるだろう。

課題としてはもう1つ。レジストロ日系社会の歴史を伝える資料を後世に伝える機能を強化することである。新築する移民史料館の図面には収蔵庫的な施設が無いが、実は従来も無かった。生活様式の変化や世代交代により、レジストロの初期の生活を伝える手がかりは少なくなっている。また、ポルトガル語が主体になっている現在、一世世代の日本語で書かれた資料は失われつつある。現在も歩み続ける日系社会の歴史を後世に伝えるための役割は、博物館としての大きな使命でもあるだろう。

以上の課題を踏まえ、移民史料館の博物館が日系社会の発展に有効的に機能する装置になり得ることを日系社会、地域社会全体で共有することが望まれる。移民史料館は日系社会だけでなくレジストロ市の財産でもある。周辺の施設や文協、市のイベント等との連携を前提として、地域活性化事業や観光事業など地域社会全体のために果たす役割を再認識することで、移民史料館の可能性は広がると考えている。

### 3 課題と展開

2016年以降、イグアッペ文協とレジストロ文協のご協力を得ながら、博物館的な施設で日系社会の歴史を伝える活動についての動向を観察させていただいた。取り組みは、いずれも途上であるため、今後も継続して調査していくことを考えている。

そして、これら2つの地域の事例を踏まえ、ブラジルの日系社会において博物館が地域の日本移民、日系社会の歴史を後世に伝える役割をどう果たしていくかを考察していきたい。

本稿を執筆するにあたって、レジストロ文協副会長の福澤一興氏、ニッケイ新聞編集長の深沢正雪氏に多くのご教示をいただいた。また、イグアッペ文協、レジストロ文協の皆さん、ブルーノ・ヒサツグ氏ほか、調査にご協力下さったすべての方々に感謝申し上げます。

#### 注

- (1) 伯刺西爾拓植株式会社による植民地設置の経緯については、『ブラジルに於ける日本人発展史』下巻（同刊行委員会編 1953）に詳しい。また、近年においては2008年に筆者が担当した渋沢史料館企画展「日本人を南米に発展せしむー日本人のブラジル移住と渋沢栄一ー」及び同図録で紹介。黒瀬郁二氏は「ブラジルの日本人植民地ーサンパウロ州イグアッペ植民地を中心にー」（同図録）、「渋沢栄一とブラジルの日本人植民地」（渋沢栄一記念財団研究部編『実業家とブラジル移住』）で詳細を明らかにしている。
- (2) 1919年、伯刺西爾拓植は国策で海興に吸収合併されたため、桂植民地、レジストロ植民地とも海興の傘下となった。
- (3) レジストロでつくられた記念誌の最初は、1922年のブラジル独立500年祭と日本からの練習艦隊、実業団の来訪を記念して編纂された『レジストロ植民地誌』（編輯委員長 松村栄治）であろう。
- (4) 奥付には「レジストロ入植五十周年記念写真帳」と書かれている。
- (5) 初期の入植者については、海興の入植者名簿とイグアッペ植民地創立20周年記念写真帖を基に、実際の入植者を認識した上で名簿が作成されている。
- (6) 設計・制作は高橋国彦氏。
- (7) なお、レジストロの友好姉妹都市である岐阜県中津川市には **Av. Registro** がある。
- (8) 前月には、友好姉妹都市の中津川市から使節団が訪問したこともあり、姉妹都市提携38周年・レジストロ日本人入植105周年・日本移民110周年を祝う式典も行われている。
- (9) Estado de São Paulo. 2006. “Diário Oficial Poder Executivo” Palácio dos Bandeirantes. March 30, 2006, p. 7
- (10) República Federativa do Brasil. 2008. “Diário Oficial da União. Seção 1” Imprensa Nacional. Janeiro 14, 2008, p. 3
- (11) CONDEPHAAT（Conselho de Defesa do Patrimônio Histórico, Arqueológico, Artístico e Turístico do Estado de São Paulo）
- (12) IPHAN（Instituto do Patrimônio Histórico e Artístico Nacional）
- (13) 新たに確認できたのは以下の施設であるが、これ以外にも存在することが推察される。沖縄移民資料館（2011年 沖縄文化センター ジアデマ市）、憩の園資料室（2008年憩の園 グアルーリョス市）、西村俊治博物館（2005年 西村俊治技術財団 ボンベイア市）、アリアンサ移住史料館（2016年第二アリアンサ ミランドポリス市）、アサイ城（2018年 アサイ市・アサイ文化連合会 アサイ市）、リオデジャネイロ日本移民資料館（2018年ブラジル日本移民／10周年記念実行委員会（リオデジ



- ャネイロ) リオデジャネイロ市)。
- (14) SESC は、教育、文化、健康、レジャー、社会事業のための民間非営利団体。各地の SESC 文化センターを拠点として、質の高い活動を行っている。
  - (15) 「レジストロ史料館が無念の移転」『ニッケイ新聞』4599号 2016年9月23日付7面
  - (16) 移民史料館新築工事のため、2018年からは Praça Beira Rio で開催。
  - (17) 1997年の修復、2016年の SESC Registro 開館時。
  - (18) 上記「レジストロ史料館が無念の移転」参照。

#### 参考文献

- 
- 安中末次郎撮影 (1933)『海外興業株式会社経営 伯刺西爾国イグアッペ植民地創立廿週年紀念写真帖 1913-1933』
  - ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会編 1941・1953『ブラジルに於ける日本人発展史』上・下
  - レヂストロ植民地開設五拾年祭祭典実行委員会 1963『レヂストロ郡現勢概覧』
  - レヂストロ連合青年会 1963『イグアッペ植民地開拓五拾周年記念アルバム』
  - レジストロ六十年史刊行委員会編 1978『レジストロ植民地の六十年』
  - 小笠原公衛 2008「ブラジル日本移民史料館—史料保存の現状—」(補記 地方の日本移民史料館・日系博物館)『ラテンアメリカ研究年報』No. 28 日本ラテンアメリカ学会
  - 渋沢史料館編 2008『日本人を南米に発展せしむ—日本人のブラジル移住と渋沢栄一—』
  - 公益財団法人渋沢栄一記念財団編 2012『実業家とブラジル移住』不二出版
  - 深沢正雪著 2014 ニッケイ新聞編『一粒の米もし死なずば ブラジル日本移民レジストロ地方入植百周年』無明舎出版
  - レジストロ日伯文化協会編 2018『CENTENÁRIO COLONIZAÇÃO JAPONESA IGUAPE—REGISTRO—SETE BARRAS』

※本稿は『比較民俗研究』第33号(2019年3月)に掲載された「ブラジル日系社会の歴史を伝える手段についての一考察—イグアッペとレジストロにおける博物館の可能性—」を改訂し再録したものである。